

RWC 熊谷 キックオフまで115日! —REBORN— 新生・ラグビータウンが トライ15で スクラム!

ラグビーワールドカップ(以下「RWC」)ロシア対サモア戦まであと115日となった。平成最初に打ち出した「ラグビータウン熊谷」もいよいよ本番。おとなり群馬県太田市からトップリーグの豪強パナソニック ワイルドナイツが本拠地移転を表明し、駅前や道路のインフラも整いつつあり、ラグビータウン・バージョンアップをめざす新プロジェクト「スクラム!クマガヤ」(次ページに詳細)も動き出した。そんな熊谷2019をフィールドとしたプレイヤー15人の声を、バス方式でお届けする。



熊谷市 RWC2019 推進室のメンバー



1.熊谷ラグビー合唱団は、上尾市の主婦三科順子さんのアイデアから広がってきた(5月号参照)
2.移動販売のフットワークも軽やかなゆりかご「ラグビーフライ(400円)」は「やきそばにタックル」

1人目はすでに自店を「ラグビーロードキックオフ店」と改称したウスキングベールの臼杵健さん。FMクマガヤでのパーソナリティをはじめ、ラグビーロードを参加者が走ったり歩いたりした距離で6か国を結ぶ「ランニングチャレンジ」、今号表紙の「ラグビー合唱団」、SNS動画シリーズ「ラグビー合宿」など、いつべーグル焼いてるんだという多動ぶりでCNNや全国紙などメディア露出も多い。「わかファン」を自称し、「ファン未満」の参加を広く呼びかける。

「RWC開催はみんな知っていても、話題にすることはそれほど多くありません。だからこそ、話題を熊谷から生み出そうと奮闘しています」

臼杵さんの熱をキャッチしたのが、障がい福祉サービス事業所ゆりかご代表でシンガーソングライターの上原秀一さん。ランチャレで着用した日本代表型タ

スキを受注、ラグビーロードのオリジナルソングアシスト、ボールの縫い目を入れた「ラグビーフライ」を開発・発売した。「閉鎖的になりがちな障がい福祉サービスの分野でも、地域密着型で年齢性別、障がいの有無を越えて、「こちや混ぜて交流できるような開かれたみんなの居場所づくりをめざしています。RWCをいざっけにしたいですね」

RWC以前はラグビーから遠かった前出2人に対し、自身のキャリアを活かしてチャンスをうかがうのが埼玉工大ラグビー部ストレングス&コンディショニングコーチを務める、「日本一の最強市民をつくる」熊谷ラグビー式最強ボディ創造ジムでビジネスフランコンテストまちづくり大賞を受賞した長沼郁生さんだ。秋に向け、ラグビーの動き、パススクラム、タックルなどのプレー

3 RWC以前はラグビーから遠かった前出2人に対し、自身のキャリアを活かしてチャンスをうかがうのが埼玉工大ラグビー部ストレングス&コンディショニングコーチを務める、「日本一の最強市民をつくる」熊谷ラグビー式最強ボディ創造ジムでビジネスフランコンテストまちづくり大賞を受賞した長沼郁生さんだ。秋に向け、ラグビーの動き、パススクラム、タックルなどのプレー

4 長沼さんとともにSNSでの本誌竹編集長のネタ募集に応じてくれたのが、青年会議所時代に「桜ルネサンス」を提唱し熊谷桜の植樹をすすめる重竹淳一さん。初めて英オックスフォード大と対戦した1952年まで今のような満開でなかったという、日本代表

5 ほかの桜より開花が早い熊谷桜の由来は、一の谷の戦いで先陣を争った熊谷次郎直実。その直実をフワードに、イエス・キリスト、エディー・ジョーンズら時空を超えた選手たちが熱戦を繰り広げる自作紙芝居「源平ラグビー熊谷決戦」を制作・自演するのが、1月号にも登場、県協会ボランティア「BAND」でも活動する鈴木國昭さんだ。同作はランチャレ当日の熊谷駅でも披露され、「楕円でもいいとも!」で配信された。



3.長沼さん、ビジネスプランコンテストでの「ラグビー体操」プレゼン
5.『源平合戦』の製作者鈴木さんは熊谷に引越して6年目。健康ウォーキングクラブで補助事業「はじめの一歩」にもトライした

6 「ラグビー紙芝居を最初は戦国武将でとってたのですが、馬を担いだ直実の画をみてフワードだ!」と思いつきました。ボランティアのメンバーに披露したら、いいもんつくってくれたと喝采。ラグビーが15人ということも初めて知りました」

8 紙芝居や畳のようなジャパネスクを、RWCとともに活かしたい部門に「観光光がある。『TOMODACHI GUIDE』は各地を訪れる外国人観光客と、ネットを通じて「トモダチ」になってから外国語を使ってガイドをするサービスで、Huber社が熊谷では観光協会と協働で展開。得意のフランス語、英語でガイドを務めるのが小久保拓さんだ。「熊谷の魅力発信し、世界との架け橋になりたい。RWCで訪れる6か国のラグビーファンに、熊谷は楽しかった、今度は友だちを連れて来ようと思ってもらえるようにしたいですね」

9 小久保さんとともに国歌合唱団の常連でもあるのが、チャダンス・チーム「Rapod」の依田美都里さん。トップリーグのハーフタイムショー、関連イベント出演のほかTBSドラマ「フーサイド・ゲーム」のロケに参加するなどラグビー漬けになりつつある。

12 小中学生の観戦は、64年東京五輪の思い出がある富岡市長がRWCの記憶を子どもたちの中に残してあげたいと発案されたという。同じようなことばを2児のママ、曙町の齊藤木綿子さんから聞いた。

14 FMクマガヤでのオンエアの様子。左が浅野さんにヘッドギアの臼杵さんも

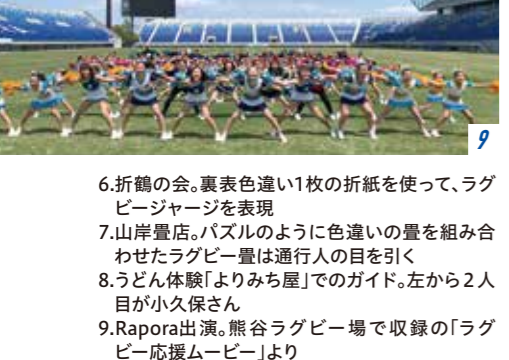
7 鈴木さんと同じくシニアの得意を活かして応援するのが、折紙を通じたボランティア活動を福祉施設や学童保育、イベントなどで展開する「折鶴の会」。浅井一恵さんはじめ10名で、7月6日の「ニヤおさねまつり」をはじめとしたイベントで、1枚の紙でつくれるラグビージャージに「ラガーニヤン」シールを付けて配布するため準備中だ。

11 チケットといえば、熊谷市は全国開催都市で唯一小中学生全員の観戦事業を実施。小さなラガーにとって、ビッグゲームのライブ体験は貴重な1月号も登場の富士見中2年根岸勇気さん。

10 応援にいちばんなのは、新装となったスタジアム。チケットの売れ行きも好調だ。会場近くに住むメリットを強調するのは、高校時代ラグビー部で現在もOB戦に出場する深谷市・旬「はんやまだ」店主の山田正美さんだ。「チケット申込サイトを定期的にチェックしてホッとしたりしてます。一番安心角席だけど、自宅から車で30分の幸福感。かなり楽しみなのはUSA戦だけど、平日だから子どもたちどうしようかな〜」

13 やはり子育て中の毎日新聞記者・大平明日香さんは、八木橋大温度計「熊谷夏の陣」猛暑にタックルなどRWC関連取材が増えているという。

15 県西部出身の原田友和子さんは、中学時代にラグビーに興味を持ち高校では部マネジャーとして活躍。民間企業に勤めていたが、RWCまで限定の市推進室職員に応募し採用された。「ファンとして、国内外各地で観戦しています。熊谷ほどボランティアの歓迎が温か、グラウンド周辺が賑やかで楽しい会場はありません。RWCをきっかけに、もっと多くの市民にそのことを伝え、誇りに思ってもらえるようにしたいですね」



6.折鶴の会。裏表色違い1枚の折紙を使って、ラグビージャージを表現
7.山岸書店。パズルのように色違いの畳を組み合わせたラグビー畳は通行人の目を引く
8.うどん体験「よりみち屋」でのガイド。左から2人目が小久保さん
9.Rapora出演。熊谷ラグビー場で収録の「ラグビー応援ムビー」より

14 大平さんと同じく「伝える仕事」で関わるのは、FMクマガヤ・パーソナリティの浅野澄(さやか)さん。熊谷を訪れたのはトップリーグなどのスタジアムMCが初めて、FM開局を知りパーソ

【取材・文 小林真(まこと)】